ニュースキャスター研究の視座
―批判的ディスコース分析と感情労働からのアプローチ―

Studies of Comments and Attitudes of News Anchors in Japan: From the Viewpoints of Critical Discourse Analysis and Emotional Labor

深　澤　弘　樹
Hiroki FUKASAWA

要約

本稿は、ニュースキャスター研究の視座について、批判的ディスコース分析と感情労働の観点から論じるものである。ニュースキャスターはニュース言説の構築に重要な役割を担っており、1960 年代のキャスターニュース登場後にその存在が注目され、ニュース研究の対象となってきた。筆者のこれまでの研究では、ニュースキャスターをニュース言説の生産における媒介者ととらえ、キャスターが言説実践にどう関わっているのかを重視し、発話行為の特徴を分析したほか、キャスターの意識を感情労働の概念を用いて読み解いた。本論文ではそうしたアプローチを批判的ディスコース分析（言説分析）のなかでどう位置づけるのかを考える。本キャスター研究ではキャスターを縛り、発話行為へと至らしめる諸力（権力）のありかに焦点をあてる。キャスターは決して独立した存在ではなく、世間で共有されている常識や規範が彼 / 彼女らの発言の内容を枠づけている。本稿では、ニュースキャスター研究を概観したうえで、感情労働概念を用いたキャスター研究を批判的ディスコース分析に接合する。さらには、昨今のネット社会で進行する共感社会におけるニュースキャスター研究のあり方を考え、今後の研究の方向性を展望する。

Keywords：批判的ディスコース分析、ニュースキャスター、感情労働、共感社会
critical discourse analysis, news anchor, emotional labor,
empathy-based society

1．はじめに

筆者はこれまでテレビニュースにおけるキャスターの語りや意識に着目して研究を続けてきた。その目的は、テレビジャーナリズムにおけるニュースキャスターの役割、媒介作用の機能を探ることであり、内容分析によってキャスターが語る内容の特徴を明らかにしたほか、インタビュー調査によってキャスターの意識を分析してきた。その際に用いた分析枠組みが感情労働であり、キャスターが世論の風向きを過剰に意識することによって無批判に世論と一体化する危うさについても指摘してきた（深澤, 2007; 2015a; 2015b; 2016; 2017; 2018）。

本稿では、以上の研究を批判的ディスコース分析[1]のなかにいかに位置づけるのかを考え、感情労働アプローチを用いた研究がテレビニュース研究やニュース・テクスト研究にいかに貢献できるのかを検討し、ニュースキャスター研究の視座を提示することを目的としている。なお、筆者がキャスター研究を始めたのは大学院在籍時の 2000 年代半ばであり、メディア状況はかなりの変化を遂げている。こうしたメディア変容を踏まえたニュース・テクスト研究が求められているのであり、社会変動も組み込んだニュースキャスター研究を再検討してみたい。

筆者は地方局でニュースキャスターを 5 年間経験している。その経験から着想を得て、キャスター研究に適用する有効性を認識して用いたのが感情労働概念であった。ジャーナリズムにおける感情労働についてはウォール＝ヨルゲンセンが『メディアと感情の政治学』（2019=2020）で指摘しており、ジャーナリズムと感情や感情労働とを結びつけた研究にも注目が集まりつつある。ニュースの最前線で視聴者と相対するキャスターは日々の業務で感情労働を強いられるのであり、その様態を実際のコメント、ふるまい等の言語面、態度面から明らかにし、これまであまり踏み込むことのなかったキャスターの意識に迫る必要性はテレビジャーナリズム研究において増しているといえるだろう。

筆者の研究は、メディア言説（media discourse）構築においてニュースキャスターが果たす役割を考えるものである。岡井崇之はメディア言説と社会の変動・変容とを理論的に考察して新たな分析概念、分析の枠組みを提示することの重要性を指摘している（岡井, 2012）。本研究ではキャスターの語りが寄与するメディア言説の編制を、共感化の進行という社会変動のなかで感情労働という分析枠組みを用いて読み解くことに意義を見いだしている。

その際に依って立つアプローチが「批判的ディスコース分析」（critical discourse analysis：CDA）である。岡井はこれまでのメディア言説分析では、社会変容といった動的なものとの接続に消極的であった点を挙げ、よりマクロな規定要因への視座が欠落していると指摘した（岡井, 2012: 29）。本論文はこうした批判にも応えるものとして、社会変容や社会変動のなかでのニュースキャスター研究について考える。

今や、インターネットの発達によって送り手と受け手の関係性は変化し、従来のニュース研究の枠組みでは現在のニュースを取り巻く現状を十分にとらえ切れない。送り手の意味づけの特徴や受け手の解釈という、カルチュラルスタディーズによるエンコーディング / デコーディングモデルからのアプローチでは現在のニューステクストの生成過程を解明することは困難になっている。マス・メディアの影響力が相対的に弱まるなか、伝統的メディアの現実構成作用に焦点化した送り手研究は新たな分析枠組みの登場が待たれている。山腰修三が述べるように、「ニュースの生産・伝達・消費過程の分析を通じて、あるいはニュースそのものの分析を通じて社会の価値観や（不可視の）権力を明らかにしようとしてきた」ニュース研究やジャーナリズム研究から一歩進め、デジタル社会における新たな枠組み、アプローチが必要とされているのである（山腰, 2022: 11-12）。

誰もが発信可能な社会となり、SNS の普及によって怒りや喜び、悲しみといったむき出しの言葉が飛び交うようになった。その状況は社会の分断を生み出すとともに、感情重視の社会が到来している。こうした現状を踏まえたうえでのニュースキャスター研究が求められている。

以上を踏まえ、本稿ではニュースキャスター研究を概観したうえで、感情労働アプローチと批判的ディスコース分析とを接合し、これからのニュースキャスター研究の方向性を展望したい。

２．ニュースキャスター研究の枠組み

（１）ニュースキャスターとは何か

ニュースキャスターについて語る前に、ニュースの読み手としてのアナウンサーの誕生について簡単に述べておく。放送の開始によって誕生したのが新しい職業としてのアナウンサーであり、アナウンサーの第一号は 1925 年のラジオ放

送開始までさかのぼる。北出真紀恵は「アナウンサーにとって放送 90 年の歴史は、共通語（標準語）とは何か、放送にふさわしいことばとはどんなものか、アナウンスはどうあるべきか、アナウンサーの職能とは何かといった問題群との苦闘の歴史でもある」（北出, 2019: 6）と述べている。アナウンサーの誕生以降、その職責や役割が議論となっており、その「問い」は現在につながっているといえよう[2]。

ニュース番組を担当するアナウンサーは単に原稿を読むだけでなく、ニュース番組の仕切り役として司会進行を担い、時にはニュースへのコメントも求められる。キャスターが前面に出て人が伝えるニュースが誕生したのは 1962 年の『JNN ニュースコープ』（TBS）であり、その後、1974 年開始の『ニュースセンター 9 時』（NHK）の磯村尚徳、『ニュースステーション』（テレビ朝日、1985 年開始）の久米宏、『NEWS 23』（TBS、1989 年開始）の筑紫哲也等の名キャスターを生み出すことになる。

では、ニュースキャスターとはどのような存在なのであろうか。『現代ジャーナリズム事典』では、金山勉が「ニュースキャスター」の項を執筆している。金山によると、「ニュースキャスター」とは「世の中の出来事をニュースとして日々伝える役割を担う放送人」のことであり、ここでの「キャスター」とは「可動式の運搬台をイメージさせることから」、ニュースを運ぶ人という意味合いで使われているのではないかと述べる。なお、欧米では「ニュースアンカー（news anchor）と表現される（金山, 2014: 228-229）。金山は日本独特の発展形態として、アメリカを模範としながら、「わかりやすさ」や「親近感」を加えるなどして日本独自のニュース報道スタイルが築き上げられたことを指摘している。

また、『メディア用語基本事典［第 2 版］』では「ニュースキャスターの心得」の項で、キャスターは原稿を読む役割だけでなく、番組の司会・進行に加え、ニュースの説明や背景の解説をする能力や取材、放送内容の編集、決定に至るまで、多様な仕事を担当していることが指摘されている（神崎, 2019: 186）。キャスターが自身の意見を述べるなど「語る」ことについては、「報道内容に偏りがないかバランスを自らの発言等で取ることも求められる」としており、意見を述べるか否かは「番組のスタンスや個人の考え方によって異なる」との記述がある。ここからは、放送法の「政治的公平性」原則との兼ね合いで、キャスターが語ることが

日本のジャーナリズムにおいて議論になっていることが示唆される。

キャスターはまた、テレビにその姿をさらして人間性や個性も問われることになる。ある意味、タレント的な要素も求められているのであり、「見られる存在」として、視聴者が描くキャスターの理想像に縛られることになる。筆者も経験しているが、それらの「まなざし」はキャスター自身を苦しめることになる。

以上を踏まえ、筆者はこれまでニュースキャスターのふるまいや意識、「語り」に焦点を当てて研究を進めてきた。それはテレビ画面を通して日々視聴者と接するキャスターが視聴者にとって身近な存在であり、世論形成に大きな役割を果たしていると考えられるからである。以下ではこうしたキャスター研究の枠組みについて改めてまとめておく。

（2）ニュースキャスターが果たす役割：相互作用の観点から

ここでは、ニュースキャスターと視聴者との関係について、画面を通した擬似的な相互作用ととらえ、そのコミュニケーション特性に着目する。

キャスターの発話行為は視聴者とのパラソーシャルな関係（画面を通した疑似社会的相互作用）によって成立している。このパラソーシャルとは、1950 年代にアメリカの社会学者ホートン（Horton）とウォール（Wohl）が唱えたもので（Horton & Wohl, 1956）、「ラジオやテレビなどの登場によって人々がタレントや司会者を身近な存在と感じ、まるで自分の友人のように向こうも自分を知っている感覚」（佐々木俊尚, 2021, https://lp.p.pia.jp/shared/cnt-s/cnt-s-11-02_2_02ed6ae8-8477-4f37-a7c6-e1e448ab004e.html, 2023 年 1 月 5 日アクセス）を生み出す。

改めて、メディアを介したキャスターと視聴者との関係を確認しておきたい。トンプソン（Thompson）は人と人との相互作用を 3 つに分けて考察しており、3 つ目[3]が「メディアを通じた疑似相互作用」（Mediated quasi-interaction）である（Thompson, 1995: 82-87; Tomlinson, 1999=2000: 277）。トンプソンはまた、メディアを通じた想像上の関係を「距離を置いた非相互な親密性」と呼んでいる（Thompson, 1995: 219; Tomlinson, 1999=2000: 292）。こうした関係について、トムリンソン（Tomlinson）は、メディアの受容者がパーソナリティとの間に築き上げる関係は相互作用的な側面が見られることを指摘し（Tomlinson, 1999=2000: 277）、メディアを介した関係による親密な関係を「脱肉体化された親密性」（p.

284)、「公的な親密性」(p. 290) と表現している。

視聴者とキャスターとの相互作用はテレビという媒体を通じての親密性を築く行為であって、「公的な親密性」を構築する。つまり、「実際には絶対に会うことのない―しかしそれでもメディアを通じて強烈な『現実性』をもって彼らの前に現れる―公的人物との想像上の親密な関係が実感できるような、マスメディアによって媒介された一つの生活世界」(Tomlinson, 1999=2000: 292) が確立されることになり、両者は同じ地平でコミュニケーションを取り、親密度を高めることになる。

こうした相互作用に支えられ、キャスターは単にニュースを読む存在から視聴者に語りかける存在となり、彼らのふるまいは視聴者との親しいコミュニケーションを打ち立て、番組の人気を支える重要な要素となっている (石田, 2003: 258)。さらには、キャスターの語りはニュースに特定の解釈枠組みを付与し、視聴者と送り手との価値の共有化をもたらす働きがあると指摘されている (山腰, 2006：220)。

ニュースキャスターにとって画面越しの視聴者の姿は見えない。しかしながら、キャスターは番組内で日常のコミュニケーションを模したふるまいや言葉づかいを心がけている。また、プロンプターの使用で視聴者にとって目線が違和感なくカメラを向くような工夫がなされており、伊藤守ら(2006)が編んだ『テレビニュースの社会学』で言及されたように「感情の共同体」の構築にキャスターは重要な役割を果たしている。

タックマン (Tuchman) によると、テレビ画面を通したキャスターと視聴者との相互作用については、キャスターから視聴者に向かって真正面に座りカメラを通して直視する構図は、「机越しに相手と面と向かっているのと同じ印象」を視聴者に与え、この「近くもなければ遠くもない距離」は視聴者への「親しみ」とニュースに対する「中立性」を表すコードになっているという (Tuchman, 1978=1991: 155-162; 高橋, 2005: 68)。キャスターと視聴者との微妙な関係が示すこの中立性はジャーナリズムの規範である「客観・中立」と合致するものであり、キャスターのあり方を規定するものである。また、同時に「親密性」を感じさせるものでもあり、中立と親密という相矛盾するとも思える両方の要素をキャスターは求められることになる。

以上のように、キャスターの語る言葉のみならず、スタジオセットやカメラアングルなどのビジュアル面もキャスターと視聴者との関係を枠づけているのであり、テレビニュース研究ではこうした映像、音声等のテレビ技術を後ろ盾にした様々な表現形態も重要な分析項目となっている[4]。

（3）ニュースキャスターの「語り」の変化が意味するもの：公的言語の会話化

これまで述べてきたようなキャスターと視聴者との関係性はキャスターのふるまいやニュース番組のあり方にも影響を与える。ここでは、ニュースキャスターが番組内で個人的な思いを語ったり、人間性を表出させるなどニュース番組のモードそのものが変化してきたことの意味を考える。

これらは、ニュース言説の構築の変化を示すもので、こうした言説の編制のあり方に注目したのがフェアクラフ（Fairclough）であった。フェアクラフは、「言説の編制」(order of discourse) の構造分析に重点を置く。言説の編制とはフーコー（Foucault）が提起した概念で、「言説のジャンルや形式が構造化されたもの」を示している。これはミクロな言説と社会的なコンテクストを接合するものであり、一般的な社会、文化的変容とも関連づけて論じられる (Fairclough, 1992: 200; 岡井, 2012: 32)。

ここでは以上の重要性を強調する岡井崇之の論考からみていく。岡井が注目するフェアクラフの概念が、「言説の会話化（conversationalization of discourse）あるいは「公的言語の会話化」（conversationalization of the public language）である（Fairclough, 1995b）。これらは具体的にいうと、「他者の語りの直接的な表象」（Fairclough, 1995b: 10）の増加を意味し、フェアクラフは、その機能として、①会話化がマス・メディア以外の領域にも影響を及ぼし、社会、文化がより娯楽的なものへと変容するファクターになっていること、②会話のイデオロギー機能の2点を挙げる（岡井, 2012: 33; Fairclough, 1995b: 13）。

会話化された言説はリアリティが表象される条件を自然化し、その例えとして、「テレビにおける街の声としての有権者の声はイデオロギーを自然化するだけではなく、司会者、流動的な投票者、街がすべて同じ生活世界に属していることをイデオロギー的に含意している」（岡井, 2012: 33; Fairclough, 1995b: 13）としている。また、岡井は「マス・メディア全般において生の声やトークが直接的に提示

される言説の在り様が劇的に増えてきた過程を社会変動や文化の変容との関係において説明しようとする『言説の会話化』」（岡井, 2004: 37）とも述べており、言説分析と社会変動との関連性を重視する立場を取る。

ここでの「会話化」とは単に、言葉どおりの出演者同士の「会話」が増加していることを指すものではないが、キャスターがスタジオで語る言葉は私たちの常識や言説の自然化に加担していると考えられる。そして、フェアクラフはメディア言語に影響を与えるものとして、「公と私の拮抗（the tension between public and private）を挙げており（Fairclough, 1995b: 10）、この拮抗がキャスターの意識や語りなどの「ふるまい」を規定するものとなっている。つまり、キャスターにとっての「語り」の準拠枠組みはジャーナリストとしての「公」（中立性・客観性）と「親密性」が求められる「私」の間で揺れることになる。

では、以上の変化を背景としたキャスターの「語り方」「意識」に焦点化したニュースキャスター研究をニュース研究のなかにどう位置づけることができるのであろうか。以下では、キャスター研究の分析枠組みについて、批判的ディスコース分析（言説分析）の知見を援用しながら考えてみたい。

３．ニュースキャスター研究の視座：批判的ディスコース分析の視点から

（１）ニュース研究のなかの送り手研究とは

筆者が取り組んできたキャスター研究はいわゆる送り手研究の系譜の延長線上にある。送り手研究の問題意識は「送り手側のどのような要因がメッセージの形成にどのような影響を与えているのか」という問いに集約される。李はこの問題意識を①メッセージに影響を与え得る送り手側の要因にはどのようなものがあり、それぞれ要因はどうなっているのか、②それぞれの要因はメッセージにどういう影響を与えるのか、の 2 点に分けて考えることができるとする（李, 1998: 54）。

そのうえで、李は送り手研究の課題として、「送り手側がどのような状況に置かれているのかに関する研究とメッセージの特徴を明らかにする研究は少なからず行われてきたにも関わらず、送り手側の変数とメッセージ変数との関連性を分析する研究はあまり行われていない」（李, 1998: 54）と指摘する。つまり、送り手研究で不足しているのは、メッセージ生産に影響を及ぼす諸力の存在やそうし

た力がメッセージをいかに変容させているのかという観点である。メディアメッセージの産出は社会と独立した送り手側の独りよがりの生産活動なのではなく、社会の構成員としての送り手が当該社会の常識や規範に基づいて生産するものだ。

以上を考慮すると、送り手の意識を規定する社会構造や権力、イデオロギーの解明と考察が不可欠となる。その意味で、ニュースキャスター研究は単なる送り手研究にとどまることなく、広く社会構造の解明も視野に進められるべきものであり、その際に有効となるのが批判的ディスコース分析の考え方である。以下で詳しく述べたい。

（2）批判的ディスコース分析とは何か

筆者のニュースキャスター研究はキャスターが語る言葉やキャスター自身の意識に焦点を当てるものである。いわばミクロの視点からのアプローチとなる。ただし、その目的は「語り」を産出せしめる様々な諸力の存在や「語り」の世論への寄与を問題とするのであり、社会のあり方を視野に入れたマクロな視点も内包するものである。こうした分析の方向性は批判的ディスコース分析に多くを負っており、この分析が目指す社会構造の解明をも射程に入れている。

ここで、批判的ディスコース分析とはいかなる概念であるのかをまとめておきたい。『批判的談話分析入門』（2001=2010）所収のヴォダック（Wodak）の論考を参照する（以下、邦訳にならって「批判的談話分析」と表記する）。批判的談話分析（Critical discourse analysis: CDA）では、言語を社会的実践とみなし、言語が使用されるコンテクストの考察を重視する。さらには、言語と権力の関係に関心を示す（Wodak, 2001=2010: 10）。

ヴォダックによれば、この分析は「言語の中に現れた支配、差別、権力、そして管理という、目に見えるだけでなく、不透明な構造上の関係性を分析することに大きく関わる研究」を意味する。また、彼女は、ハーバーマスの定義を引き合いに出し、言語を支配と社会的権力の媒介物と位置づけ、組織化された権力関係の正当化に寄与するものとして、言語のイデオロギー性に着目する（Wodak, 2001=2010: 11）。談話（ディスコース）は、「支配的な力関係によって構築され」ているのであり、「支配構造が権力集団のイデオロギーによって正当化され」、「支

配構造は、慣習を安定させ、それを自然なもの」にする（Wodak, 2001＝2010: 12）。以上を、キャスターが語る言葉で考えるのであれば、キャスターの発話はニュースの内容の意味を受け手に再認識させ、理解を促すとともにニュースが伝える世界観を自然なものとして社会に定着させる働きを有している。

この分析手法でキータームとなる権力やイデオロギーとはいかなる意味で使われているのであろうか。名嶋義直は、力によって他者を支配しようとする集団や制度などを「権力」と呼び、それらは相対的な力関係であるとする。また、「権力」は他者を支配しようする「意図」を持って行動し、また実践として言説を作り出し、「自らが持つ価値観や理念、思考構造、行動様式など」を発信するのだという。さらには、こうした自分や他者を支配する世界の見方がイデオロギーだとする（名嶋編, 2017: 3; 名嶋, 2018: 6）。また、フェアクラフは、イデオロギーについて「権力や支配や搾取の社会的関係の確立、維持、変化に関与するものとして表されうる世界の諸相を表象するもの」（Fairclough, 2003=2012: 11）としている。

批判的談話分析が批判の対象とするのは「権力」の持つ「イデオロギー」であり、それによる「支配」である（名嶋, 2018: 6）。本分析は、言説のなかにある「権力側の意図」「イデオロギー」や「その意図に動機づけられた支配の実践」について、批判的な視点で読み解き、権力意図・イデオロギー・実践を見つけ出すことを目的とする（名嶋編, 2017: 3-5）。

また、高橋圭子は、この分析における「批判的」が持つ意味について「あたりまえのように見過ごされている物事の意味や価値を厳密に問い直し、そこに潜む問題をとらえ直すという意味である」（高橋, 2005: 63）として、当該社会で当然とされている考え方に埋め込まれている権力を問い直すことだと指摘している。

なお、ここでの「談話」とは、言語学的には「複数の文から成る、一定のまとまりを持つ言語的単位」を意味するが（名嶋, 2017: 163）、メディア研究では、会話や書かれた文字のみならず、顔の動きやジェスチャー、印刷におけるレイアウトなどイメージや記号論的、マルチメディア的に意味を持つ側面を含んだ「コミュニケーション事象」全般を意味する（van Dijk, 2001=2010: 136）。

メディア研究での「談話（ディスコース）」は「言説」と訳されることも多い。この場合、メディアの報道全体を意味し、報道を構成するテキストには何らかの意味が織り込まれ、書き言葉や話される言葉だけでなく、映像や写真なども含ま

れている（三谷, 2021: 37）。また、フェアクラフは、言説について「テクストの生産・消費という社会的相互作用の全過程を指しているとし（Fairclough, 2001: 20）、テクストは生産と消費を通じてある一定の意味へと収斂されることになる（三谷, 2022: 37）。

（3）ニュース研究における批判的ディスコース分析

本稿の主題であるニュース研究について、批判的ディスコース分析を用いていかに行い、何を目指すのかをまとめていく。山腰修三は批判的言説分析（ここでは批判的ディスコース分析と同じものとして扱う）の分析手法は言語学から発展してきたアプローチであるが、批判的コミュニケーション論に基づくニュース分析の中心的手法に位置付けられているとしている（山腰, 2022: 52）。その理由として、この手法がテクストの言語学的、記号論的な分析にとどまらない射程をもつことを挙げている。具体的には、テクストの生産・流通・消費に関わるコミュニケ―ションの諸過程や、それを可能にする制度や秩序、権力も問題視していることを指摘する。そして、専門的な組織文化を通じて生産され、社会の諸制度に支えられているニュースは、この手法に適しているとしている。

さらに、先行する批判的アプローチを発展させた点にも言及する。山腰はこの手法が批判的言語学とニュースの生産・受容過程におけるイデオロギー作用に注目してきた批判的コミュニケーション論、特に、「意味づけをめぐる政治」概念とを結びつけて体系化してきたことに注目している。このほか、メディアの分析に様々な政治理論や社会理論概念をも組み込む方法論も継承されていることにも有用性を見いだしている（山腰, 2022: 52-53）。

続いて、批判的言説分析の代表的な分析モデルについてまとめておく。山腰によると、代表的な分析モデルは「ミクロ」「メゾ」「マクロ」の 3 つの分析レベルから構成されるもので、具体的に以下のように説明することが可能である（山腰, 2022:53; Torfing, 1999: 215）。

ミクロのレベルでは、テクストの表象や組織化の様態が分析される。言語学的な知見に基づく統語論的、意味論的、語彙論的、レトリック的な特徴が主たる分析対象となる。メゾレベルについては、テクストの生産と消費の過程、すなわち、言語実践が分析される。「エンコーディング・デコーディングモデル」「意味づけ

をめぐる政治」と連関し、あるいはそれらの概念を組み込むレベルである。また、「間テクスト性」がキー概念となる。そして、マクロレベルにおいては、特定の言語実践を成り立たせる「社会・文化的諸実践」が分析される。特定のテクストの生産と消費に直接関連する状況、テクストの生産と消費が埋め込まれた制度に関する諸実践、そして社会や文化のより広範なフレームが分析対象となる。特に、経済的、政治的（権力とイデオロギーの諸問題に関わるもの）、文化的（価値とアイデンティティの諸問題に関わるもの）諸側面に関心が寄せられる（Fairclough, 1995b: 61-62; 山腰, 2022: 53）。

日本におけるニュース研究の展開を各レベルに適用すると以下のアプローチとしてまとめられる（山腰, 2022: 55）。

①ミクロレベル：ニュースのテクスト分析
②メゾレベル：ニュースの生産・消費過程の分析（ニュース生産の慣行、ニュースで表象された出来事や主体に関する社会の中での解釈のされ方の分析）
③マクロレベル：ニュースのテクストにおける特定の意味づけを成立させる権力のメカニズムの分析（例えば、ニュースメディアの制度的特徴、イデオロギーやヘゲモニー、歴史的文脈など）

これまで筆者が行ってきたキャスターコメントの分類、言語的特徴の分析については①のミクロレベルの分析といえるであろう。このほか、感情労働概念を用いてキャスターの意識を分析する枠組みはメゾレベルにあたり、その意識変容は社会変容に呼応するものであってマクロレベルの社会変動の分析へとつながる。

（4）メディア・フレームとは何か

続いては、ニュースキャスターの語る内容を分析する際に有効なニューステクストのフレーム分析について概説する。ニュースにおける支配的な意味づけは当該社会の価値観や常識、政治的、経済的アクターとの関係性等の諸力の影響を受けるものであり、キャスターコメントも支配的な価値観の影響を受けると同時に、その発話行為が価値観を再生産する働きをしている。社会におけるある一定の見

方はメディア・フレームと呼ばれており、キャスターの語る内容はニュース内容の確認、強調、増幅する側面があり、当該ニュースのフレームはキャスターの語りによって「自然化」することになる。

フレームとは、「特定の意味づけや解釈のパターンに基づいたニュース・ストーリーの組織化原理」であり、「出来事や争点をめぐる問題の原因の特定化や解決策が導き出されることになる」と山腰は述べる（山腰, 2022: 31; 119）。先ほどの分析モデルに適用すると、社会や文化の広範なフレームの解明はマクロレベルでの分析となる。具体的には、メディア・フレームはフレーミング効果という個人の認知に焦点を当てた効果研究のほか、フレームの構築過程やフレーム概念を用いた社会における支配的価値観の分析などで用いられるなど発展を遂げている（三谷, 2021: 11）。この場合、フレーミングあるいはフレームが設定された報道を通じて、出来事や争点の意味づけが社会で広く共有され、そうした報道で適用された出来事や争点の意味づけのフレームが、オーディエンスのフレームとジャーナリストのフレームの相互作用を通じて構築されることになる（三谷, 2021 : 11; Scheufele, 1999）。

メディアが報道する内容とは、ジャーナリストや情報源、社会で共有されている価値観が反映されたものと考えられるのであり、メディア・フレームはさまざまな力が反映されたものとなる。また、社会で共有されている価値観はしばしば「世論」という形態で表出する（三谷, 2021: 38）。

以上のメディア・フレームに基づいて構成されるのがニュースの言説であり、その性質として、第一のテクスト生産の観点からは、ある出来事が生じた場合にその出来事は多様な解釈が可能だとしても、ニュースとして報道される際には特定の意味が付与されることになる。第二のテクスト消費の観点からは、オーディエンスはニュース・テクストの多様な解釈の可能性を持つにもかかわらず、ニュースに含まれる言葉やイメージなどによって解釈に制限が加えられる。これらのテクストの生産と消費（言説実践）は、特定の政治エリートではなく、政治的・社会的文脈、特に社会の支配的価値観（社会文化的実践）によって規定される（Fairclough, 1995b: 59、三谷, 2022: 43）。以上を踏まえ、三谷はニュースの言説分析の意義を以下のように述べる。

ニュースを言説として捉えることにより、政治エリートやジャーナリストのみならずオーディエンスを含めた形での言説の編成過程を問うことが可能になる。言説分析の観点からフレーム概念を捉えなおすことにより、アクターの相互作用を視野におさめることができる。（三谷, 2021: 43）

さらには、「言説分析の視座に基づくフレーム分析とは、ニュースのテクストに表れる、パターン化された語りの中心にある原理（フレーム）を析出し、いかなる価値観や信念がテクストに反映されているのかを明らかにするものである」（三谷, 2021: 44）と述べるように、ニュースの言説分析では、アクターの相互作用が重視されている。筆者も同様の問題関心をもっており、送り手としてのキャスターと受け手としての視聴者との相互作用によって支配的な価値観が形成されるという立場を取る。その相互作用のメカニズムを解明するための分析枠組みとして有効なのが感情労働概念である。

以下では、感情労働概念も含めたキャスター研究の論点を提示したうえで、批判的ディスコース分析と接合させていかなる展開、発展が考えられるのかをみていきたい。

4. キャスター研究の知見から：共感社会のなかでの感情労働

（1）ニュースキャスターの「語り」への注目：これまでの知見から

1）言語学の分野から

批判的ディスコース分析（言説分析）を用いて実際にニュースキャスター研究がどのように行われてきたのか、これまでの知見をまとめておく。この分野は言語学と社会学をまたがる研究領域であり、言語学（社会言語学）領域の研究者が取り組むケースも目立っている。例えば、ひつじ書房から刊行されている『メディアとことば』シリーズは第 5 巻（2020 年）まで刊行され、「メディアとことば研究会」の研究の成果が収められている。そのなかからいくつか紹介したい。

代表例として、村松賢一のキャスター同士のおしゃべりの研究を挙げる（2005）。村松は、キャスター同士のおしゃべりを CC（Conversations among broadcasters の略）として分析を試みた。彼は 2004 年 1 月の 1 週間に放送された NHK と TBS、そしてテレビ朝日の 3 番組を分析対象として、自衛隊のイラク派遣を題材に、キャ

スターが語る内容とその働き（機能）について分析した。その際、「フレーミング研究」とヤコブソンのコミュニケーション機能論に依拠して分析を試みている[5]。

村松は、「政治」「経済」「社会」「スポーツ」「芸能」「気象」の 6 つのジャンルなかでどのジャンルで CC が頻繁に行われているのかを明らかにしたほか、ニュース後の発話について「批判」「意見」「感想」「情報補足」「メタコメント」に分けて分析した。村松は、ニュース後のコメントについては、視聴者にニュースの受け止め方（解釈＝フレーム）を示しているとして、フレーミング機能を有するものと結論づけている（村松, 2005: 13）。村松はまた、マス・コミュニケーションにおけるフレーミングは送り手側がニュース制作時に依拠する「メディアフレーム」と受け手側がニュースを解釈する際に働く「オーディエンスフレーム」に分かれるとし、Scheufele（1999）が提示した①フレーム形成、②フレーム設定、③個人レベルのフレーム効果、④受け手から送り手へのフィードバックのうち、ニュースキャスターの CC は②の「フレーム設定」に当たるものとした（村松, 2005: 14）。

このほか、高橋圭子は NHK の『クローズアップ現代』を例に、ニューステクストの語りとニュースインタビュー（キャスターとゲストとのやりとり）において「公正・中立・客観性」がいかに具現化され、どのような物語が潜んでいるのかを分析した[6]。高橋は、番組の典型的な構成をまとめたうえでニュースキャスターの「語り」の配置を模式化した。この際に先ほど述べたタックマンの知見を用いて、「語り」が視聴者に親しみを感じさせるとともに、中立性を示すことに注目した（高橋, 2005: 68）。

高橋が述べる「公正・中立・客観性」は日本のジャーナリズムで標榜されてきた原則であるが、高橋は「公正・中立・客観性」のもつ意味について、中途半端、曖昧、ごまかしで終わり、「結局、力ある側に有利に働くのではないか。当該社会において、違和感なく受け入れられる言説にこそ、権力支配の再生産に都合のよい価値観が潜んでいるのではないか」と指摘した（高橋, 2005: 81）。これは公正・中立・客観性の陥穽ともいえるもので、中立・客観を保とうとするキャスターの言語実践を権力支配に加担しているととらえることは、ジャーナリズム研究の面からも重要な論点を含んでいるといえよう。

2）メディア研究の分野から

メディア研究では、2001 年刊行の『変容するメディアとニュース報道』において、萩原滋らがテレビニュースの娯楽化傾向の詳細な分析を試みている。このなかで萩原滋は、1997 年放送の複数のニュース番組分析でニュース後のキャスターのコメントに言及している。このうち、「スタジオでの言動とニュースの伝達者」の分析では、ニュース後に何らかのコメントが確認されたのが全体の項目の 23％、キャスターや出演者の対話は 19％の項目でみられた。これに対して萩原は、日本のニュース番組ではニュース後のコメントやスタジオでの対話はそれほど一般的ではないものの、個人的意見を述べることが少ないアメリカに比べると、コメントや会話が多いという見方を示している（萩原, 2001: 94）。

続いて、2006 年刊行で伊藤守が編集した『テレビニュースの社会学』から紹介する。代表的なものは藤田真文の研究である。藤田はキャスターの「語りかけ」を①言語的モード、②非言語的モード、③映像化のモードに分けて分析を行っている（藤田, 2006: 39-40）。ここでの「語りかけ」とは、キャスターから視聴者への仮想的な対人コミュニケーションと定義され、非言語コミュニケーションも含んでいる。言語面に偏らない手法はマルチモダリティ分析と呼ばれる。テレビという映像、音声が複合したメディアに適合したもので、多様なモードで私たちの意識を構成する働きを重視したものだ。

以上の分析によって、藤田は①キャスターから視聴者への対人コミュニケーションが擬装され、カメラ目線やキャスターの「語り（トーク）」によって両者の密接な関係を生んでいる点に加え、②ニュース番組の水平なカメラポジションやカメラアングルは語り手の視点・心情などが安定している点を指摘し、誠実で信頼できるキャスターの印象を作り上げているほか、報道の真実性を高めていることを強調した（藤田, 2006: 51-52）。

筆者が行ったテレビニュースの内容分析についても紹介しておく。筆者は 2007 年 6 月に放送されたニュース 3 番組（NHK『おはよう日本』『ニュースウオッチ 9』、テレビ朝日『報道ステーション』）を対象に 1 週間分のニュースを録画して分析を試みた（深澤, 2015a）。ニュースのジャンルの分布を明らかにしたうえで、どのジャンルのニュース項目でキャスターの「語りかけ」がみられるのかを分析した。その傾向は番組ごとに差異があるが、全体のニュース項目の 37.6％で「語

りかけ」がみられた。そのうち、キャスターが自身の意見や感想を述べるニュース後の「受け」コメントに着目すると、『報道ステーション』ではハードニュースと呼ばれる「政治」や「社会」のニュースでコメントが頻繁になされ、ニュース全体でコメントの時間が長いことが分かった（平均時間 1 分 4 秒、NHK の『ニュースウオッチ 9』は 22 秒）。

また、地方局 6 局分のニュースを題材に同様の分析を行っている（2016）。「語りかけ」の確認された項目は局ごとに 7.4％から 50.2％とかなりばらつきがあり、各放送局の考え方の違いが色濃く出た。また、キャスターコメントの有無と内容を確認するとソフトニュース（話題やスポーツ等）でのコメントが圧倒的に多く、筆者が調べた限りでは、地方局のキャスターは、意見が分かれる政治関連のトピックで自身の見解を述べるような「もの申す」ジャーナリストタイプではないことが明らかになった。

これまでの研究からみえてきたのは、テレビニュースの娯楽化が進行するなかで、ニュースキャスターの「語り」や非言語表現を含めたふるまい全般がニュースの構成において重要視され、視聴者にアピールする戦略となっていることに加えて、その際にニュースキャスターを含むニュースの送り手が中立性を重視して報道を行っている点と、テレビメディアを通じて視聴者とキャスターとの親密な関係性が築かれている点である。以上は筆者が行ってきたニュースキャスター研究における重要な論点であり、その中立・客観性規範と親密性重視の間で揺れるキャスターの意識に焦点を当てて研究を進めてきた。そして、近年はネットによる共感社会化の進展がキャスターの意識をいかに規定しているのかにも関心を持って研究を進めている。

（2）重要視される客観・中立性と親密性：送り手調査から

ジャーナリズム組織にとって、中立性や客観性、公平性は守るべき規範であり、とりわけ放送法の規律が存在する放送メディアにとっては最も重視すべき原則といえる。筆者は地方局 27 社を対象にアンケートに行い、報道責任者にニュース制作で重視すべきことを聞いた（深澤, 2015b）。その際、16 項目を設定し、重視する度合いを 5 段階で評価してもらったところ（もっとも評価する場合が 5）、平均がもっとも高かったのが「客観性」（平均値 4.54）、続いて「地域の問題の掘

り起こし」と「権力監視」が続き（同 4.50）、その後に「中立であること」が 4.36 で続いた。

なお、報道責任者にとっての中立とは、報道する際の視点や姿勢の存在をも否定するものではない。その後に行った聞き取り調査（回答 10 社）では、報道する際の注意点として、両論併記を心がけたり様々な意見を取り上げるなどしてバランスを取りながらも、多様性重視や住民本位の報道を心掛けていることが明らかになった。これらは、2011 年の東日本大震災以降に注目を集めた市民に寄り添う「ケアのジャーナリズム」（林香里）に通じるものがある（深澤, 2017; 2018）。

寄り添う姿勢は、キャスターの理想像にも現れる。先述のアンケートで、報道責任者にキャスターが視聴者に与える印象で重視するものを 10 項目のなかから選んでもらった。その結果、男性キャスターについては、①安定感、②安心感、③親しみやすさ、誠実さ、清潔感（3 項目同ランク）、女性キャスターに対しては、①親しみやすさ、②清潔感、③誠実さが上位にランクされた。この結果からは、毎日同じ時間に放送し視聴習慣が大切なテレビ視聴において、情報の信頼度を高めるために、ヒトとして親しみやすく好感度の高いキャスターが求められていることがわかる。一方、「権力監視」につながる印象として「鋭さ」も回答に入れておいたが、10 項目中、男性が 7 番目、女性が 9 番目にとどまった。地方局の場合は同じ地域で暮らしている「生活者」の視点が求められる傾向が強く、権力に対峙して鋭いコメントを発するキャスタースタイルは地方局ではそれほど求められていないこともこの結果の要因としてあろう。

親しみやすさ重視はキャスター自身も内面化している。筆者が行ったキャスターの聞き取り調査からみえてきたのは、視聴者に寄り添う姿勢であり、権力監視よりも「親しみやすさ」を重視する傾向である。こうした姿勢はキャスターが発するコメントにも現れる。また、世論を二分するようなトピックではより慎重な姿勢が要請されることから、キャスターは自身の意見を述べずことを避け、考える材料を提供する役割を重視していた。これらはキャスターに求められる「中立性」原則重視から来るであろう。

なかには、中立を志向するよりも、「住民本位の姿勢から公正さを重視し、市民の側に立った発言が必要」とする意見もあった。ここからは共感ジャーナリズムに通じる寄り添う姿勢を重んじる方向性がみて取れる。あるキャスターは、キャ

スターの存在とは地域をまわる「駐在さん」のようなもので、地域住民の代弁者であると表現した（深澤, 2018: 65）。さらには、キャスターインタビューでは、「視聴者との共感」「信頼関係」「視聴者により近い感覚」「親しみやすさ」「清潔感」「安心感」といった言葉が多く聞かれた（深澤, 2017: 46-47）。

以上から、ニュース番組におけるニュースキャスターの内面を規定しているのはジャーナリズムにおける規範である中立性・客観性、権力監視とともに、視聴者との擬似的相互関係から生み出される「親しみやすさ」「親密性」であることがわかる。こうしたキャスターのふるまい、行動規範を説明する分析ツール（枠組み）として筆者が用いているのが感情労働の概念である。

（3）感情労働としてのキャスターのふるまいと共感社会の到来

1）感情労働とジャーナリズム

近年、報道を感情労働に結びつける論考が発表されている。代表的なのがウォール＝ヨルゲンセン（Wahl-orgensen）が著した『メディアと感情の政治学』（2019＝2020）である。本書で注目すべきは、感情を基盤とした報道が重視され、人々の心を動かす報道がここ数年の潮流となっているという指摘である。彼女はピューリツァー賞受賞記事を分析し、昨今の報道は感情が重視されていることを明らかにした。ウォール＝ヨルゲンセンは、これまでのジャーナリズムの実践はタックマンのいう「戦略的儀礼としての客観性」に影響されているという。報道では感情表現が規制され規律化されており、ジャーナリスト自身の感情表現は抑制されている。しかしながら、ジャーナリストは市民に感情労働を外部化しているのであり、感情がメディア化された公的生活を支え、構築、生産する基本的な力であると述べる（Wahl-Jorgensen, 2019＝2020: 33-34）。

メディアにおける感情表現は、特定の目的のために注意深く演出されたものであり、「戦略的パフォーマンス」として理解される。ウォール＝ヨルゲンセンはまた、ジャーナリズム組織で働く人々は感情労働を行っているとし、「感情労働の外部化」を指摘した。これは、記事内でジャーナリスト自身が自らの感情を語ることは避け、集団や集合的な感情、記事の主人公の感情を記述する。つまりここでの外部化とは「記事で用いられる感情表現をめぐる責任の外部化、あるいはオーディエンスの感情の誘発という形での外部化」を意味する。「ジャーナリズ

ムにおける語りに含まれる感情は、情報源が語ったり提供したりすることで示される」（Wahl-Jorgensen, 2019 ＝ 2020: 81）ものと理解される。

２）感情労働とは何か：キャスターのふるまいとの結びつき

「感情労働の外部化」を行うジャーナリストのなかにはニュースキャスターも含まれる。感情労働を報道の前線で行っているのがニュースキャスターといえるだろう。以下ではジャーナリストの意識やふるまいを感情労働の観点からみていきたい。

ここで感情労働とはいかなる労働形態であるのかを説明する。この概念は社会学者のホックシールド（Hochschild）が提唱したもので、感情が社会的に構築される面に着目し、その際の規則を感情ルール（規則）と名づけた。現代の職業は対人関係を基盤とすることが多く、人々は他者に不快感を与えないように自身のふるまいを変化させる。接客業では笑顔で客に接することは職業規範とされ、店員にはそのようなふるまいが要請される。ホックシールドは以下の 3 つの条件が感情労働には必要とした（Hochschild, 1983=2000: 170）。

① 対面あるいは声による顧客との接触
② 他人に何らかの感情の変化を起こさせること
③ 使用者による労働者の感情活動の支配

筆者は以上の条件をニュースキャスターに適用し、①擬似的な相互作用によって視聴者と接触していること、②親密性を感じてもらうためにキャスターがふるまっていること、③日々の訓練によって感情のコントロールの方法を体得し、それがキャリアを重ねることで身についていくこと、の 3 点をインタビュー調査から明らかにすることで、キャスターのふるまいの感情労働的側面を強調した（深澤, 2007; 2015）。

筆者が感情労働とキャスターの意識やふるまいを関連づける狙いは、感情労働とは他者とのコミュニケーション（相互作用）から生じるものであり、キャスターが視聴者との仮想的なコミュニケーションを通じて印象操作を試み、演技する存在といえるからである。ゴフマンがドラマトゥルギー理論で舞台上での演技にたとえたように、キャスターもテレビの向こうの視聴者に向かってパフォーマンス

を行い、印象操作する存在ととらえることが可能である。ホックシールドはまた、印象操作に似た概念として「感情操作」を提示した。これは感情の面での印象操作であり、感情を律する規則である感情ルールに従って自らの感情をコントロールする「深層演技」を意味する。人々は深層演技で心の底から感じているように自身の心を仕向けることで葛藤を軽減するのである。

では、キャスターにとっての感情ルールとは何であろうか。それは第一に中立や客観、権力監視を是とするジャーナリズムの規範であり、キャスターはジャーナリストとしての自負をもちながら職務にあたる。そして、不特定多数の視聴者がキャスターに求める期待全般としての「期待の束」のようなものも含まれる。これらはジャーナリズムの体現者としての視聴者からの期待であり、キャスターと視聴者との親密性を維持させるための共通意識、共同体意識ともいえるものである。

それらは、時にキャスター自身の感情とズレることもある。筆者がキャスターに行ったインタビューでは、あるキャスターは自身の意見と主流の意見が異なる場合、感情を操作して世間一般で支配的な意見に合わせるケースがあると吐露している（深澤, 2015a: 164-165）。これらはキャスターが自らの役割を内面化して割り切る「健全な切り離し」（Hochschild, 1983=2000: 215）を行っているのであり、「公的な親密性」を構築しようするキャスターの言語実践といえるだろう。

山腰がいうように、ニュースキャスターを含むテレビジャーナリストとオーディエンスは「共犯関係」にある（山腰, 2006: 223）。キャスターのニュース感覚と受け手の相互作用によって社会の支配的な価値観が再生産されるのであり、キャスターは視聴者に「共感」してもらいたいと考え、視聴者も親近感を持つキャスターに好意を抱く。この場合、キャスターは深層演技を行うことで、自身の意見、感情を表に出すことをせず、常に世論の動向を気にして、それをなぞるような発言になる傾向がみられる。

しかしながら、この営みは困難を伴う。社会の分断が進む昨今、キャスターは何を準拠枠組みにすべきか悩むこともあろう。その一例が 2021 年に開かれた東京五輪での報道姿勢であった。コロナと五輪の世界がパラレルに存在するなかで、テレビの五輪に傾倒したはしゃぎぶりが問題視され、開催前の批判的な論調からメダルラッシュを嬉々として喜ぶ姿への豹変ぶりが「手のひら返し」と批判を受

けた。当時みられたのは、社会で大勢を占める意見の風向きに合わせて自身のコメントを調整するキャスターのふるまいであり、一方でコロナを不安がり、一方で嬉々としてメダル獲得を喜ぶ相反した姿勢であった（深澤, 2022）。以上からみえてくるのは、ジャーナリズムを体現する存在として権力監視を重視するキャスターの姿勢と、五輪のメダルラッシュに沸く世間や 1 年延期で大会にこぎつけた選手の苦悩に寄り添おうとし、両者の狭間で揺れるキャスターの姿であった。

ウォール＝ヨルゲンセンがいうように、メディア政治では「感情が多くの場合、制御・加工され、方向づけられて」おり、メディアにおける感情はパフォーマティブに構築され、戦略的に用いられている。そして、その根底にある権力関係に注意を払う必要が生じている（Wahl-Jorgensen, 2019=2020, 245-246）。まさしくそのパフォーマティブな感情労働を強いられているのがキャスターで、昨今はネット社会の進展により、より共感を求める動きが強まっている。

（4）共感重視社会におけるジャーナリズム・ニュースキャスター

共感という言葉自体はこれまで、ポジティブな意味合いで用いられることが多く、人間関係を円滑に営むために必要とされてきた。ジャーナリズムの世界でも前述の「ケアのジャーナリズム」や「課題解決型ジャーナリズム」において、受け手に共感し寄り添う姿勢は重視されている。また、報道経験者から「共感ジャーナリズム」という言葉が使われることもあり（谷, 2018）、筆者自身はその有効性を否定するものではない。ただし、行き過ぎた感情化は送り手の感情労働を促進させるとともに、民主主義の基盤となる情報提供を行うジャーナリズムやキャスターを困難な状況に追い込む危険性をはらむ。

大塚英志（2016）や永井陽右（2021）は近年の著作で共感の負の側面を強調する。また、ブルーム（Bloom）は共感を重視することによって、近視眼的で、道徳的感覚を歪める危険性を指摘し、感情化の進展によって公共性がないがしろにされることに警鐘を鳴らす（Bloom, 2016=2018: 42）。共感重視のあやうさは言論空間の編制でも同様であり、公共的な議論が成立しにくい状況を作りだしている。

こうした変化はかつて佐藤卓己が輿論から社会の気分としての世論へ転換を指摘したことと符合するものであり、インターネットはそれにさらに拍車をかけているといえるだろう。ソーシャルメディア社会ではフィルターバブルによるエ

コーチェンバー現象が引き起こされ、社会の分断が進行している。世論の分断は「感情ルールの複雑化」を示すことになる。佐藤は、「輿論の世論化」による情報社会から情動社会への変化は加速するはずとし、「つながっている状態そのものに価値をみとめる接続依存型コミュニケーションのSNSが主流となる情動社会では、情緒的な世論に人々は身をゆだねるだけになるのではないか」（佐藤, 2019：285）と述べる。このような社会でキャスターは「身をゆだねる」のではなく、何を語るべきかが問われているのであり、その視点からテレビジャーナリズムのありようと可能性を探ることが必要であると筆者は考えている。

５．結びにかえて：批判的言説分析からみたキャスター研究と今後の方向性

ここまでニュースキャスター研究について、批判的ディスコース分析と感情労働を用いた知見を紹介しながら研究の視座を確認してきた。最後に、感情労働概念を用いたキャスター研究について今後の発展の方向性を考えてみたい。

先に述べたように、山腰はニュース言説の研究をミクロ、メゾ、マクロレベルで示した。筆者が行ってきたキャスターの語りのコメント分析はミクロレベルの水準にある。キャスターがどのジャンルで、いかに語ったのかという言語的特徴を明らかにすることはジャーナリズム特有の文法の解明につながるが、言語学の知見を用いたさらなる精緻化が望まれる。

以上の研究からの展開を考えた場合、言語的な特徴や傾向分析という静態的分析にとどまることなく、より大きな社会構造やキャスターの意識を規定する諸力の解明にいかにつなげるかが課題であろう。言語の特徴を生み出しているのがキャスターを縛る規範意識である。この意識を解明するのが感情労働概念を用いた分析であり、それによって、メゾ、マクロレベルでの研究へと水準を引き上げることが可能となる。

感情労働概念からキャスターの意識を探る研究を発展させる際に、ネット社会の到来というメディア変容を考慮する必要がある。彼ら / 彼女らが依って立つ感情ルールがどう変化しているのか。ネット社会でいかなる変容を遂げているのかを探ることにより、これによってメゾの視点からキャスターコメントの生成のメカニズムについて探ることが可能である。さらにはマクロの視点として社会の構造的変化ともつなげて分析することも要請される。

前述のウォール＝ヨルゲンセンは、近年、ジャーナリズムと感情に関連した研究が活性化してきており、その問題関心として、①ジャーナリズムの実践が感情や感情労働によってどのように形成されるのかを理解すること、②ジャーナリスティックなテクストに内在する感情を研究すること、③オーディエンスがどのようにニュースと感情的に関わるのかを研究すること、を挙げている（Wahl-Jorgensen, 2019=2020: 53-54）。日本のニュース研究においても、以上の関心を基盤として進めることが重要であると考えている。

筆者は地方局のキャスターにインタビューした経験を持つが、メディアを取り巻く環境は激変し、ネット社会化はさらに進行している。キャスター自身もその変化を肌で感じ、「語る」ことの難しさを感じていることが予想される。今後、ネット社会がキャスターの意識にいかなる影響を与えているのかをインタビュー調査から明らかにするつもりである。

これまで、メディアのテクスト分析では語られた言葉、表象に焦点が当てられ、言語的な特徴が研究されてきた。しかしながら、メディアの送り手がいかに思考し、言葉を選択し、実際の発話へと至るのかといったプロセスはこれまで注目されておらず不可視のものとなっている。筆者としては、キャスターの発話やふるまいをもたらす諸力について感情労働という概念を用い、また、共感社会化という社会の変化と結びつけて論じていきたい。

※　本論文は日本学術振興会科学研究費助成事業 基盤研究（C）「共感社会におけるニュースキャスターの役割：コメントの言説分析と意識調査から」（課題番号：21K01884、代表者：深澤弘樹）による研究成果の一部である。

【注】

1　批判的ディスコース分析の英語表記は、Critical Discourse Analysis であり、頭文字をとって CDA と略される。また、近年は「批判的談話研究（Critical Discourse Studies）:CDS」と呼ばれることも増えている（名嶋, 2018: 1）。日本語では、批判的談話分析や批判的言説分析と訳されることもある。本稿では基本的には「批判的ディスコース分析」を用いるが、研究者や書籍、文献によって呼び方が違うため、そうした名称も合わせて使用している。

2　アナウンサーは正しい日本語の使い手としての役割を担い、そのための訓練を経て一人前になっていく。2005 年刊行の『新版 NHK アナウンス・セミナー』（NHK 出版）において、当時のアナウンス室長であった山根基世は、アナウンサーの専門能力について「読む」「聞く」「司会する」「中継する」ことを挙げ、アナウンサーの仕事が多様で高度化していることを指摘している（p.2）。高度化するアナウンサーの仕事の一つがニュースキャスターであり、先述の能力をベースとして、報道番組に携わるための様々なスキルが求められることになる。

3　一つ目が「顔と顔をつき合わせた相互作用、二つ目が「メディアを通じた相互作用」で手紙や電話など空間的、時間的に離れた相手との相互作用を指している（Thompson, 1995: 82-87）。

4　こうした分析の手法を「マルチモダリティ分析」と呼ぶ。メディア言説とは複数のモード（様態）が組織化されたものとの考え方から来ており、それらはキャスターの語りや BGM、テロップ等を意味する。デジタル技術の発展によって言説のマルチモダリティ化が進行しており、テレビニュース研究は複雑化するモードの複合も射程に入れて行う必要に迫られている（岡井, 2015: 130-131）。

5　ヤコブソンのコミュニケーション機能とは交話機能を指している。交話機能とは、挨拶や世間話などの雑談を指し、行為そのものは儀礼的なものだが、話者同士の人間関係を確立したり維持したりすることに役立つ（橋内, 1999: 16）。キャスターと視聴者は画面越しの関係であるが、キャスターが日常会話と同じように番組のオープニングで挨拶することで、親しい関係が確立、維持される。

6　テレビスタジオでのインタビューは会話分析において「制度的会話」とされ、山田富秋（2004）らによって研究されている。

参考文献

Bloom, P., 2016=2018, *Against Empathy: The Case for Rational Compassion*, Bodley Head, 高橋洋訳『反共感論』白揚社.

Fairclough, N., 1992, *Discourse and Social Change*, Polity.

————, 1995a, *Critical Discourse Analysis*, Longman.

————, 1995b, *Media Discourse*, Arnold.

————, 2001, *Language and Power*, *Second Edition*, Longman.

————, 2003, *Analysing Discourse*, Arnold.

————, 2003=2012, *Analysing Discourse*, Arnold, 日本メディア英語学会メディア英語談話分析研究分科会訳『ディスコースを分析する : 社会研究のためのテクスト分析』くろしお出版 .

藤田真文, 2006,「テレビニュースの談話分析 : キャスターから視聴者への語りかけの分析」伊藤守編『テレビニュースの社会学』世界思想社 : 37-53.

深澤弘樹, 2007,「感情労働概念からみたニュースキャスターの意識とふるまい」『中央大学　大学院研究年報　文学研究科篇』第 36 号 : 65-81.

————, 2015a,『変容するテレビニュースとキャスターの役割』春風社.

————, 2015b,「ローカルニュースの『現在』: 全国地方局アンケートから」『駒澤社会学研究』第 47 号 : 141-168.

————, 2016,「内容分析からみるローカルニュースの現状」『駒澤社会学研究』第 48 号 : 123-149.

————, 2017,「地域ジャーナリズムにおける客観・中立・公平とは : ローカル局インタビュー調査から」『駒澤社会学研究』第 49 号 : 29-57.

————, 2018,「ローカルニュースにおけるキャスターの役割・存在意義：地方局の聞き取り調査から」『駒澤大学ジャーナリズム・政策研究所　年報』第 35 号 : 51-84.

————, 2021,「ジャーナリズムにおける『感情』『共感』を考える」『駒澤社会学研究』第 57 号 : 27-51.

————, 2022,「コロナ禍の東京五輪はいかに語られたか : テレビニュースのキャスターコメント分析から」『駒澤社会学研究』第 58 号 : 27-54.

萩原滋, 2001,「ニュース番組の内容と形式 : 娯楽化傾向の検証と番組の類型化」萩原滋編著『変容するメディアとニュース報道 : テレビニュースの社会心理学』丸善 : 67-114.

橋内武, 1999,『ディスコース : 談話の織り成す世界』くろしお出版.

林香里，2011，『＜オンナ・コドモ＞のジャーナリズム：ケアの倫理とともに』岩波書店.

Hochschild, A. R. , 1983=2000, *The Managed Heart*：*Commercialization of Human Feeling*, University of California Press, 石川准・室伏亜希訳『管理される心：感情が商品になるとき』世界思想社.

Horton, D., & Wohl, R. R., 1956, Mass Communication and Para-Social Interaction: Observations on Intimacy at a Distance, *Psychiatry*, 19: 215-229.

石田英敬, 2003,「テレビと日常生活：テレビの記号論的再考」『放送メディア研究』第 1 号：231-266.

金山勉, 2014,「ニュースキャスター」武田徹・藤田真文・山田健太監修『現代ジャーナリズム事典』三省堂 : 228-229.
神崎博, 2019,「ニュースキャスターの心得」渡辺武達・金山勉・野原仁編『メディア用語基本事典［第 2 版］』世界思想社 : 186.
北出真紀恵, 2019,『「声」とメディアの社会学 : ラジオにおける女性アナウンサーの「声」をめぐって』晃洋書房.
国谷裕子　『ニュースキャスター』岩波新書.
李光鋪, 1998,「メッセージ分析による送り手研究：主な研究事例と今後の課題」『マス・コミュニケーション研究』第 53 号 : 53-64.
三谷文栄, 2021,『歴史認識問題とメディアの政治学』勁草書房.
村松賢一, 2005,「ニュース番組における『おしゃべり』」三宅和子・岡本能里子・佐藤彰編『メディアとことば 2』ひつじ書房 : 2-29.
永井陽右, 2021,『共感という病』かんき出版.
名嶋義直編, 2017,『メディアのことばを読み解く 7 つのこころみ』ひつじ書房.
名嶋義直, 2017,「特定秘密保護法に関する記者会見記事の批判的談話分析：批判的リテラシーの重要性」名嶋義直編『メディアのことばを読み解く 7 つのこころみ』ひつじ書房 : 161-191.
————, 2018,『批判的談話研究をはじめる』ひつじ書房.
NHK アナウンス・セミナー編集委員会編, 2005,『新版　NHK アナウンス・セミナー：放送の現場から』NHK 出版.
岡井崇之, 2004,「言説分析の新たな展開：テレビのメッセージをめぐる研究動向」『マス・コミュニケーション研究』第 64 号 : 25-40.
————, 2012,「メディアと社会変容をめぐる新たな視座：言説分析からのアプローチ」『東洋英和大学院紀要』第 8 号 : 25-37.
————, 2015,「ニュースのマルチモダリティ分析」伊藤守編『よくわかるメディア・スタディーズ』ミネルヴァ書房 : 150-151.
大石裕, 2004,「ニュース分析の視点 : 内容分析と言説分析」『法學研究 : 法律・政治・社会』第 77 巻第 1 号 : 103-125.
大塚英志, 2016,『感情化する社会』太田出版.
佐藤卓己, 2008,『輿論と世論 : 日本型民意の系譜学』新潮選書.
————, 2019, 『流言のメディア史』岩波新書.
Scheufele, D.A., 1999, Framing as a Theory of Media Effect, *Journal of Communication*, 49（1）: 103-122.
高橋圭子, 2005,「『クローズアップ現代』の〈物語〉」三宅和子・岡本能里子・佐藤彰編『メディアとことば 2』ひつじ書房 : 62-97.
谷俊宏, 2018,『「共感報道」の時代 : 涙が変える新しいジャーナリズムの可能性』花伝社.
Thompson, J.B., 1995, *The Media and Modernity; A Social Theory of the Media*, Stanford University Press.
Tomlinson, J., 1999=2000, *Globalization and Culture*, Polity Press, 片岡信訳『グローバリゼーション :　文化帝国主義を超えて』青土社.

Torfing, J., 1999, *New Theories of Discourse: Laclau*, *Mouffe*, *and Žižek*, Blackwell Publishers.
Tuchman, G., 1978 ＝ 1991, *Making News: A Study in the Construction of Reality*, Free Press, 鶴木眞・櫻内篤子訳『ニュース社会学』三嶺書房 .
van Dijk, T.A., 2001=2010, 'Multidisciplinary CDA: a Plea for Diversity' in Wodak, R. and Meyer, M., (eds.) *Methods of Critical Discourse Analysis*, SAGE Publications, 服部圭子訳「学際的な CDA: 多様性を求めて」ルート・ヴォダック　ミヒャエル・マイヤー編著, 野呂香代子監訳『批判的談話分析入門』三元社 : 133-166.
Wodak, R., 2001=2010, 'What CDA is About: a Summary of its History, Important Concepts and its Developments' in Wodak, R. and Meyer, M., (eds.) *Methods of Critical Discourse Analysis*, SAGE Publications, 山下仁訳「批判的談話分析とは何か？ : CDA の歴史、重要概念と展望」ルート・ヴォダック　ミヒャエル・マイヤー編著, 野呂香代子監訳『批判的談話分析入門』三元社 : 9-25.
山田富秋, 2004,「エスノメソドロジー・会話分析におけるメッセージ分析の技法」『マス・コミュケーション研究』第 64 号 : 74-68.
山腰修三, 2006,「テレビ・ジャーナリストの『ニュース感覚』」大石裕編『ジャーナリズムと権力』世界思想社 : 207-228.
————, 2021,「対立・分断の五輪報道の果ての『敗北の抱きしめ方』について」『Journalism』第 377 号：18-24.
————, 2022,『ニュースの政治社会学 : メディアと「政治的なもの」の批判的研究』勁草書房.
Wahl-Jorgensen, K., 2019=2020, *Emotions*, *Media and Politics*, Polity Press, 三谷文栄・山腰修三訳『メディアと感情の政治学』勁草書房.